

Let's Know Hiroshima Castle.

しろや！ 広島城



No.78



写真1 「寛永年間広島城下図」(部分。加筆)
広島城蔵。景観年代は寛永年間(1624～44)前期頃

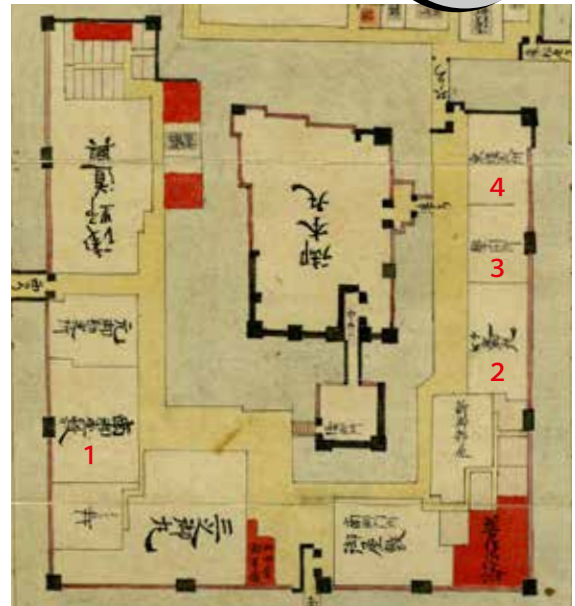


写真2 「芸藩広島城下之要図」(部分。加筆)
広島市公文書館蔵。景観年代は明治初期。数字は表2に対応

三の丸にあった藩主一族の屋敷「御三之丸」

はじめに

広島城天守閣の博物館に替わって令和8年度中に開館する予定の新博物館「広島城三の丸歴史館」は、その名のとおり広島城の旧三の丸内に立地します。三の丸は本丸と二の丸を囲む凹字型の曲輪で、浅野藩政期には重臣の屋敷や藩施設(役所)のほか、「御三之丸」「御新屋敷」「竹之丸御屋敷」などの藩主一族が居住する屋敷(御殿)も存在しました。今回は新博物館建設予定地近くに存在した御三之丸について探りたいと思います。

1 御三之丸の位置と規模

御三之丸は三の丸の南西部、二の丸表御門から御門橋を渡って正面左手の場所に位置し、「三之御丸」とも呼ばれました。その規模は時期によって異なり、浅野氏初期段階の「寛永年間広島城下図」(写真1)

と最終段階の「芸藩広島城下之要図」(写真2)を比較すると、敷地が西方向に拡張されたことが見て取れます。18世紀初頭成立の記録「広島藩御覚書帖」には御三之丸の敷地規模に関する記述があり、それを図化すると図1のようになります。御三之丸の絵図は広島市立中央図書館浅野文庫に二枚残されていますが、両者を比較すると敷地形状や建物や庭の構成が異なっており、さらに「広島藩御覚書帖」の敷地規模とも異なります。よって、御三之丸の敷地形状や内部構成は、居住者の変更や周辺区画の再編に伴って何度も変化したと考えられます。

2 17世紀の御三之丸

浅野藩政期を三区分し、他の浅野一族屋敷の状況もふれながら、各時期における御三之丸の利用状況や改変などを見ていきましょう。

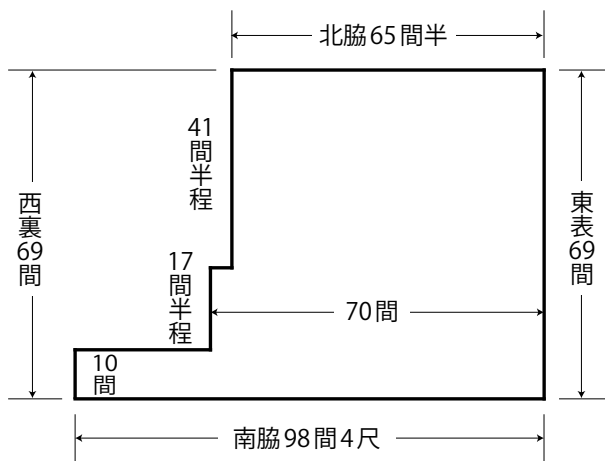


図1 江戸時代中期における御三之丸の敷地規模
 「広島藩御覚書帖」(『広島県史近世資料編Ⅱ』所収)より作図

御三之丸の正確な設立時期は不明ですが、広島藩主浅野氏初代長晟^{ながあきら}の時期、寛永2年(1625)9月に屋敷の上棟式が行われ、世子(世継ぎ)光晟^{みつあきら}が移徙(転居)したことが確認できます。当時の光晟は元服前でしたが、家督相続に不可欠な将軍への初御目見を元和9年(1623)に済ませていました。光晟は寛永4年(1627)8月に元服、翌年には家臣の謁見を受けるなど政務に参画していたことも窺え、御三之丸への転居は将来の元服・政治への参画を想定して行われたと推測されます。

光晟が家督を継いだ寛永9年(1632)12月以降、御三之丸は支藩三次藩の初代藩主長治(光晟の異母兄)の宿所として使われるようになります。三次藩の藩庁は三次郡三次町(三次市)に置かれていましたが、三次藩主が広島に出仕する機会は多く、その際の宿所として使用されたのです。寛文8年(1668)6月以降、三次藩主は主に佐伯郡草津村(西区草津。当時は三次藩領)に宿泊しているため、三次藩宿所としての役割は同年までに終わったと考えられます。

寛文12年(1672)4月に光晟が隠居し、三代綱晟^{つなあきら}が家督を継ぐと、御三之丸は光晟の隠居所となりました。光晟隠居所としての使用は、延宝元年(1673)の綱晟死去、四代綱長襲封を経て、光晟が死去する元禄6年(1693)4月まで続きました。この間、光晟は三次藩主二代長照(光晟三男。長治の養子)や三代長澄(綱晟二男、長照の養子)の訪問を受けた際に、御三之丸内の「御居間」や「御囲」(茶室)で料理や御茶を振舞ったことも確認できます。

3 18世紀の御三之丸

宝永元年(1704)、四代綱長の世子吉長は御三之丸で三次藩主浅野長澄やその家臣と対面しており、光晟死後の御三之丸は吉長の屋敷となったようです。これより先の元禄14年(1701)11月頃、御三之丸で何らかの普請が完成し御披露目の能興行が行われましたが、この普請は居住者の変更に伴うものだったのかもしれません。

五代吉長期については、晩年の吉長が宝暦元年(1751)12月に御三之丸で病氣療養し、翌年正月に死去したことが確認されます。なお、この時期、三の丸西部では「御新屋敷」という藩主一族の屋敷が寛保4年(1744)までに成立したようですが、当初の利用状況は不明です。

吉長死後、六代宗恒期の御三之丸は居住者不在のため建物が荒廃し、宝暦9年(1759)11月と明和2年(1765)7月には建物の一部が撤去されました。また、明和3年(1766)には庭が大破していたことも確認できます。

宝暦6年(1756)以降、宗恒は三の丸西部に位置した御新屋敷の拡張・整備を進めたほか、宝暦9年(1759)には三の丸東部に二男忠鼎^{かね}(後に肥前唐津藩主水野忠任の養子となる)と三男長員^{かず}(後に浅野内証分家三代当主となる)の屋敷も設けています。二人の屋敷は南北に並んでおり、南側の忠鼎屋敷は後に「一之御屋敷」「南之御屋敷」「南御屋敷」、北側の長員屋敷は後に「二之御屋敷」と呼ばれました。長員屋敷の北の区画は後に「三之御屋敷」と呼ばれましたが、その名からここも一時期藩主一族の屋敷だったと推測されます。

宝暦13年(1763)2月に宗恒が隠居し七代重晟が家督を相続すると、宗恒は御新屋敷を隠居所とし、稲荷社(三の丸稲荷)を建立するなど屋敷の整備をさらに進めました。併せて庭の整備も進められ、御三之丸の庭石の一部が御新屋敷へ移設されたことも窺えます。しかし、御三之丸の利用状況については、天明5年(1785)に暑気対策を目的に重晟の逗留が検討されたことが確認できるほかは不明です。

寛政11年(1799)8月、重晟が隠居し八代斉賢^{なりかた}が家督を相続すると、翌年に重晟は一之御屋敷(南

之御屋敷)を隠居所とし、「竹之丸御屋敷」と名付けました。一方、御三之丸の利用状況については、斉賢期も不明です。総じて18世紀は御三之丸に関する記録が少ないのですが、これは御三之丸の利用が減ったことを反映していると考えられます。

4 19世紀の御三之丸

幕末・明治時代初期における御三之丸については、関係史料が豊富で、多くの使用事例が確認できます。長期間居住していたのは隠居した九代斉肅で、安政5年(1858)4月に引退すると、慶應4年(明治元年〔1868〕)正月に死去するまで御三之丸を隠居所としていました。また、斉肅生母梅梢院も元治元年(1864)7月から御三之丸に居住し、慶応3年(1867)6月に同地で死去しています。

明治2年(1869)8月の版籍奉還に伴い、十二代長勲は本丸御殿から御三之丸に居所を移し、ここを浅野氏本邸としました。しかし、明治4年(1871)7月の廃藩置県により長勲は東京永住が命ぜられ、

家族も東京へ移住することとなり、浅野氏一族の屋敷としての御三之丸の長い歴史が終わりました。

さいごに

御三之丸の利用状況としては、①世子の屋敷、②支藩当主やその家族の宿所、③前当主の隠居屋敷、④病気療養など短期の逗留先、などがありました。①と③に関しては、本丸御殿は当主の空間で、そこに居住することは当主たる証しでもあったため、一人前になった世子や庶子、隠居した前当主は別の空間に居住したと考えられます。広島藩主浅野氏の場合、その場所の一つが御三之丸だったのです。

なお、冒頭で触れた、御三之丸を描いた二枚の絵図(広島市立中央図書館浅野文庫蔵。標題は二枚とも「御三之丸絵図」)の画像は、紙面の都合で紹介できませんでしたが、広島市立図書館貴重資料アーカイブ(<https://adeac.jp/hiroshima-city-lib/top/>)で閲覧可能です。そちらも是非ご覧ください。

(篠原達也)

| 代 | 藩主 | 治世期間 | 利用状況 |
|----|----|--------------------------|---------------------------------|
| 初 | 長晟 | 元和5(1619)~寛永9(1632) | 世子光晟屋敷(1625~) |
| 2 | 光晟 | 寛永9(1632)~寛文12(1672) | 三次藩主宿所(~1668頃) |
| 3 | 綱晟 | 寛文12(1672)~寛文13(1673) | 光晟隠居所 |
| 4 | 綱長 | 寛文13(1673)~宝永5(1708) | 光晟隠居所(~1693) 世子吉長屋敷(始期不明) |
| 5 | 吉長 | 宝永5(1708)~宝暦2(1752) | 病気療養に伴い吉長が短期逗留(1751-52) |
| 6 | 宗恒 | 宝暦2(1752)~宝暦13(1763) | 不明 |
| 7 | 重晟 | 宝暦13(1763)~寛政11(1799) | 不明 |
| 8 | 斉賢 | 寛政11(1799)~文政13(1830) | 不明 |
| 9 | 斉肅 | 天保2(1831)~安政5(1858).4 | 不明 |
| 10 | 慶熾 | 安政5(1858).4~安政5(1858).9 | 斉肅隠居所 |
| 11 | 長訓 | 安政5(1858).11~明治2(1869).1 | 斉肅隠居所(~1868) 梅梢院隠居所(1864~67) |
| 12 | 長勲 | 明治2(1869).1~明治4(1871) | 浅野氏本邸 |

表1 御三之丸の主な利用状況

| 代 | 藩主 | 御新屋敷 | 一之御屋敷 | 二之御屋敷 | 三之御屋敷 |
|---------|----|---------------|---------------------|---------------------|-----------------|
| 初 | 長晟 | ※ | ※ | ※ | ※ |
| 2 | 光晟 | ※ | ※ | ※ | ※ |
| 3 | 綱晟 | ※ | ※ | ※ | ※ |
| 4 | 綱長 | ※ | ※ | ※ | ※ |
| 5 | 吉長 | 御新屋敷 | ※ | ※ | ※ |
| 6 | 宗恒 | 御新屋敷 | ※ (忠鼎屋敷) | ※ (長員屋敷) | ※ |
| 7 | 重晟 | 御新屋敷 一之御屋敷 | 一之御屋敷 南之御屋敷・南御屋敷 | 二之御屋敷 学問所(1782~) | 三之御屋敷 北ノ御屋敷 |
| 8 | 斉賢 | 南御屋敷 | 竹之丸御屋敷 (1800~) | 学問所 | 東明地 |
| 9 | 斉肅 | 南御屋敷 | 竹之丸御屋敷 | 学問所 | 不明 |
| 10 | 慶熾 | 南御屋敷 | 竹之丸御屋敷 | 学問所 | 東講武所 (1864~) |
| 11 | 長訓 | 南御屋敷 | 竹之丸御屋敷 | 学問所 | 東講武所 |
| 12 | 長勲 | 南御屋敷 | 竹之丸御屋敷 | 学問所 (~1870) | 不明 |
| 写真2での位置 | | 1 | 2 | 3 | 4 |

表2 三の丸における藩主一族の屋敷の変遷(御三之丸を除く)

※は家臣の屋敷として使用されていたことを示す

〔参考文献〕

- ・『史跡広島城跡資料集成 第一巻』広島市教育委員会 1989
- ・広島県双三郡三次市史料総覧編修委員会編『広島県双三郡・三次市史料総覧 別巻 三次分家済美録』広島県双三郡三次市史料総覧刊行会 1980
- ・原田伴彦編『日本都市生活史料集成 4 (城下町篇2)』学習研究社 1976
- ・小鷹狩元凱編『坤山公八十八年事蹟 乾』林保登 1932
- ・『村上家乗 慶応三年・明治元年』広島県立文書館 2006
- ・『村上家乗 元治元年・慶応元年』広島県立文書館 2008
- ・『村上家乗 明治二年一四年』広島県立文書館 2010
- ・『村上家乗 安政五年・六年』広島県立文書館 2016
- ・『大日本古文書 家わけ第2 浅野家文書』東京大学出版会 1906
- ・『広島県史近世資料編 II』広島県 1976
- ・『広島城下町絵図集成』広島市立中央図書館 1990
- ・『広島城絵図集成』財団法人広島市未来都市創造財団 広島城 2013

コラム これからの広島城

令和8年10月開館予定！広島城三の丸歴史館

広島城三の丸歴史館は、令和7年度後半をもって閉館する広島城天守の博物館機能（展示・収蔵）を拡充して移転し、新たな広島の歴史・文化の発信拠点となる施設です。

○展示内容

1階は、広島城の見どころや周辺の施設を紹介する「総合ガイダンス展示」のほか、子どもから大人まで幅広い年代の方が、広島城の特徴や歴史を楽しみながら学べる体験展示などを予定しています。

2階は、常設展示室、テーマ展示室、特別展示室があり、常設展示室では、「広島城下絵屏風」、「金箔押鯰瓦」など実物資料を中心に、広島城天守の模型や広島城の「御三之丸」にあった「御囲」（茶室）の再現のほか、映像コンテンツも使用して広島城とその城下の歴史・文化を紹介します。

テーマ展示室では、常設展示の内容を踏まえて、広島城の歴史・文

化に関わるテーマを取り上げ、収蔵品を紹介する展示などを定期的に行う予定です。特別展示室では、企画展示を行います。

広島城三の丸歴史館は、令和8年10月の開館予定です。着々と整備が進む歴史館のこれからにご注目ください。

(広島市市民局文化スポーツ部文化振興課広島城活性化担当)



外観イメージパース図：令和5年10月末時点

しろや
!
広島城

編集・発行

公益財団法人広島市文化財団
広島城

〒730-0011
広島市中区基町 21-1
電話：082-221-7512
FAX：082-221-7519

令和6年2月29日発行

広島城利用案内

開館時間 9:00～18:00 (12月～2月は9:00～17:00)

入館の受付は閉館の30分前まで

入館料 大人370円(280円)

高校生・シニア[65歳以上]180円(100円)

()内は30名以上の団体料金

休館日 12月29日～31日(その他臨時休館あり)

ホームページ <https://www.rijo-castle.jp>

「しろや！広島城」のバックナンバーは、広島城のホームページからダウンロードできます